

# 塩谷郡市医師会だより

## Contents

臨時役員会報告  
 学術講演会報告  
 シリーズ「塩谷医療史」6

社団法人 塩谷郡市医師会  
 広報委員会

〒329-1312  
 さくら市桜野1319番地3  
 さくら市氏家保健センター内  
 TEL 028(682)3518  
 FAX 028(682)5760

## ■塩谷地区一次救急体制構築へ始動

### 臨時役員会で話し合われる



懸案であった塩谷地区の一次救急医療体制の構築に向け塩谷郡市医師会が動きだした。

塩谷地区は3次医療機関を持たない医療圏で、行政の区分では県北医療圏に属する。救急医療体制は、一次救急を「在宅休日当番医」と平成18年から始まった「塩谷地区休日夜間こども診療室」が担当し、二次救急は黒須病院と塩谷病院が担当している。しかし、基幹病院の勤務医不足や塩谷病院の経営移譲問題などから基幹病院の機能が低下し、以前は管内の救急車受入率は60%を超えていたのが、最近では30%台と低下している。受け入れられない救急患者は県北地区や宇都宮地区の基幹病院に搬送されていた。

最近、県内の医療圏は基幹病院の勤務医の負担減少や診療所と基幹病院の機能分化を

目指して、一次救急は休日に限定せず、平日や休日の夜間もカバーする体制が構築されている。しかしながら、塩谷地区は会員数が少ないことや医療圏の面積が広いことなどから同様の体制を組むのは困難と考えられていた。また、塩谷地区の一次救急患者も県北や宇都宮地区の夜間診療所を利用する割合が高かった。

塩谷郡市医師会では平日・休日の準夜帯で、開設場所は黒須病院の一か所に絞り、二人体制にすることで専門性を補い、医師会員の全員参加とするなどの案を執行部がまとめ、山田医師会長名で医師会員に9月9日付けで通知された。以下がその骨子である。

- 1) 休日の小児救急外来は発展的解消をして、一年を通して準夜救急診療を行う。
- 2) 診療時間は19時～22時とする。
- 3) 2名の診療体制とし、経験を補う。
- 4) 開設場所は当面黒須病院内に置く。
- 5) 診療科を問わず原則全員参加とする。但し、70歳以上については自由参加とする。
- 6) 開設時期は2011年4月とする。

9月27日(月)に塩谷郡市医師会臨時役員会が開催され、一次救急医療体制の構築について話し合われた。上記の執行部案の可否も含め、今後、各医師団より選出された委員会で細部を詰め、さらに広域行政との話し合いや調整を行い、来年4月実施を目指す。

塩谷郡市医師会ホームページ/メール	広報委員会編集部	医師会事務局
URL <a href="http://www.tochigi-med.or.jp/shioya/">http://www.tochigi-med.or.jp/shioya/</a> メール <a href="mailto:shioya@tochigi-med.or.jp">shioya@tochigi-med.or.jp</a>	岡 一雄 <a href="mailto:r2d2@msh.biglobe.ne.jp">r2d2@msh.biglobe.ne.jp</a> 尾形新一郎 <a href="mailto:ogata@o-ga-ta.or.jp">ogata@o-ga-ta.or.jp</a>	桑川 <a href="mailto:shioya@triton.ocn.ne.jp">shioya@triton.ocn.ne.jp</a> 坂和 <a href="mailto:sakawa@e-shioya.jp">sakawa@e-shioya.jp</a>

### 「子宮頸がんは予防の時代へ」

日時：平成 22 年 8 月 3 日（火）

講師：自治医科大学産婦人科教授

鈴木 光明先生

1年間に日本人の女性のうち、約 15000 人が罹り、約 3500 人が命を落とすのが子宮頸がんの現状である。また、20-30 歳代の罹患率や死亡率が増加しており、この年代の女性のがんでは圧倒的に多い。講師の鈴木先生はもともと婦人科の癌の治療がご専門だが、子宮頸がんがワクチンという手段を得て、治療から予防の時代になったことを全国で精力的に講演されており、産婦人科以外の医師には大変啓蒙的でわかりやすい話であった。

子宮頸がんの原因は HPV（ヒトパピロマウイルス）で、その種類は 150 種類にも及ぶが、そのうち子宮頸がんの原因の約 7 割は 16、18 型が占める。このウイルスは性交渉の経験のある女性の 60-80% が一生に一度は感染するありふれたウイルスで、持続感染して癌を引き起こすのは 1-2% と考えられる。もともと子宮頸がんは検診で発見しやすい癌であったが、子宮頸がんワクチンの開発と普及によって一次予防が可能になり、このワクチンと検診を組み合わさることにより、毎年失われる 3500 人の命、あるいは子宮摘出により妊娠出産の可能性が奪われるという悲劇を防ぐことができるわけである。

このワクチンの効果は約 20 年持続すると考えられており、現在世界で先進国を中心に 26 カ国で公的補助が行われている。日本でも市町村レベル（山梨県では県レベル）で公的補助が始まっている。

予防接種というどうしても小児の感染症や高齢者のインフルエンザ、肺炎球菌ワクチンなどを想像しがちだが、子宮頸がんワクチンが開発され使用することができるようになったというのは、ある意味で衝撃的な事実であり、われわれ医療関係者はもっと一般に広く啓蒙する必要があると感じた。

チンが開発され使用することができるようになったというのは、ある意味で衝撃的な事実であり、われわれ医療関係者はもっと一般に広く啓蒙する必要があると感じた。



### 「糖尿病患者における脂質管理」

日時：平成 22 年 9 月 21 日（火）

講師：自治医科大学内分泌代謝科講師

野牛 宏晃先生

糖尿病の患者数は年々増加しており、様々な合併症のために平均寿命は男 10 年、女 14 年も短い傾向にある。今回の野牛先生の講演は、その平均寿命を短くしている主な原因の一つである大血管合併症の話であった。

糖尿病の患者の死因は大血管障害の中でも特に虚血性心疾患が多いが、そのリスクファクターが LDL コレステロール値の高値、次いで中性脂肪の高値である。糖尿病の良い指標である HbA1c を下げても 3 大合併症といわれる腎症、網膜症、神経障害は減らすことができても、大血管障害は減らすことができないことが大規模スタディで判明しており、糖尿病患者の寿命を延ばすには脂質管理が重要であることがわかってきた。

脂質管理の薬としてコレステロールにはスタチン系薬剤、中性脂肪にはフィブラート系薬剤が用いられるが、心筋梗塞などの血管イベントを抑制するにはスタチン系を用いてコレステロール値を下げるのが重要であることが示された。また、スタチン系の中でも新しいストロングスタチンと呼ばれる

強力にコレステロール値を下げる薬の重要性が増している。薬の副作用はストロングスタチンでも従来のスタチンと大きな差はない結果が出ている。また、LDL-C/HDL-Cが1.5以下を目標として下げることによって動脈硬化の退縮が期待できることが示され、今後の糖尿病患者の脂質管理についてクリアカットな講演をしていただいた。講演後には医師会員から多くの質問があり、活気のある講演会であった。

### 子宮頸がんワクチン関連ニュース

さくら市では8月1日から公費補助による子宮頸がんワクチン接種が各医療機関で個別接種の形で始まった。公費補助は小学6年生が全額補助、中学1-3年生が半額補助である。8月末までの一回目の接種率は市当局の集計では小学6年生が86%、中学生が48%で、事前の予想よりも接種率が高い結果となった。また、高根沢町では9月に行われた議会で子宮頸がんワクチンの小学6年生と中学生の全額補助が決められ、10月から実施される。矢板市でも議会で市長が来年度からの実施を表明した。塩谷町でも医師団が既に助成の要望を町に提出している。

8月4日開かれた衆議院予算委員会で長妻厚生労働大臣は、子宮頸がんワクチンの接種費用を来年度から公費助成する方針を明らかにした。助成額や接種年齢は今後検討し、新年度予算案に盛り込む予定。国が公費助成を決めたことで今後全国的に子宮頸がんワクチンが普及することになると思われる。

また、先の矢板市議会では市長が子宮頸がんワクチンの他に、ヒブワクチン、小児・高齢者の肺炎球菌ワクチンの補助も来年度から行うことを表明した。そのため、今後他の市町も同様の補助を行うものと予想される。

### 納涼会開催される

7月30日(金)矢板市あおい亭において恒例の納涼会が開催された。当日はあいにくの雷雨であったが、初めて参加する会員もいて和気藹々とした酒席であった。



### 黒須光雄詩集出版

シリーズ塩谷医療史でも取り上げたが、黒須病院の故黒須光雄先生の詩集「去りし五月の思ひでのために」が出版された。一昨年さくら市ミュージアムの企画展「みんなの大恩人 黒須菊三九・光雄先生」の準備作業の中で黒須光雄先生の詩稿、歌稿が発見され、御子息の黒須良玄先生、充子夫人の理解が得られ出版の運びとなった。

特に二高(現在の東北大学)時代の詩は瑞々しさとともに青春時代特有の苦悩を表出しており、光雄先生は医療人、文化人としてばかりでなく文学者としても優れていたことがわかる。良玄先生のご好意で、少数ですが配布できますので、希望する方は医師会まで御連絡ください。



## 医者と地方文化

明治後半から大正、昭和にかけて、絵画・俳句などの分野で活躍し、氏家町の文化の中心にいたのが蕪木五泉（明治 14 年生）である。五泉は絵画や俳句の才能もさることながら、その明るい性格と巧みな話術で、幅広い人脈を築き、多くの医者と交流があった。

その一人が喜連川病院（現佐野医院）の斎藤嘉雄である。斎藤嘉雄は明治 28 年那須郡湯津上村生まれ、喜連川病院を再興した斎藤邦一郎の婿養子となり、大正 9 年喜連川病院を継承した。物理学者のアインシュタインから名を取った「斎藤一石」という俳号を持っていた。五泉の日記には次のように書かれている。

斎藤一石氏外科室竣功を視して

鶉啼くや新室にメス揮うとき

また、遊び心に溢れた俳句も残している。

斎藤一石と共に薬王寺に泊まる

春寒う寺に泊るや医師と絵師

因みに薬王寺は氏家の桜野にある寺である。

旧氏家町桜野の根本医院の根本武雄とも交流があった。根本武雄は明治 38 年生まれ、昭和 8 年塩谷町船生に開業、戦後氏家に移るが、船生時代の根本家を五泉が訪ねている。「昭和 12 年 11 月 8 日 船生の根本様に招れて青鬼灯子と連れだちゆく - 中略 - 終日雨やまず根本家に泊り鶉の御馳走にあづかる翌日また雨にて滞泊、翌朝雨晴れければ根本様の案内に皆して鶉小屋の在る山へ出掛けぬ - 続く」

この時五泉は「桜がり博士の妻の若かりし」と詠んでいる。この「博士の妻」とは新婚の武雄の妻のことで、実は青鬼灯子の娘である。青鬼灯子は本名を小菅武といい、当時五泉と

共に「獺祭吟社」という正岡子規の直系を意味する俳句の会を主催していた。その子の小菅聞一も医師かつ俳人であり、俳号を小菅三千里といい、戦後の一時期、氏家で開業していた。根本武雄は義父青鬼灯子の影響なのか、柊葉子という俳号を持ち毎年 9 月 19 日の子規忌には根本家で句会が開かれていた。句会だけでなく謡曲、歌舞伎、芝居などにも熱中したらしい。

もう一人忘れてならないのが黒須病院の創設者の黒須菊三九である。菊三九は明治 11 年生まれ、明治 40 年県立宇都宮病院から氏家共立病院の院長に招聘された。本人も俳句を詠んだが、どちらかというと荒井寛方や五泉のような芸術家を支援した活動が目立つ。菊三九は昭和 27 年 2 月 11 日に亡くなったが、病気の菊三九を慰めるために五泉は自筆の絵を描いた葉書を 2 月 4、5、6、7、8 日付けで 5 日連続送っている。御存じのように菊三九の長男、光雄はその後の氏家の文化を牽引していくことになる。

同じ時期にこれだけ多くの医師が地方の文化活動に足跡を残した。そして、その間を取り持ったのが蕪木五泉という風流人であった。その蕪木五泉の展覧会が現在さくら市ミュージアムで行われている（会期は 10 月 24 日まで）ので、興味のある方はぜひ、ご覧ください。尚、文中の敬称は省略しました。

（担当：岡一雄）



句会が盛んに行われた築 120 年の根本医院母屋